

ISSN 1342-2405

D.H.ロレンス研究

第33号

2023

日本ロレンス協会

目 次

特別寄稿

切齒扼腕日記より——プシュケーの悲劇	武藤 浩史	3
--------------------------	-------	---

書評

Catherine Brown and Susan Reid (eds.)

The Edinburgh Companion to

<i>D. H. Lawrence and the Arts</i>	木下 誠	13
--	------	----

Ben Stoltzfus

D. H. Lawrence's Final Fictions:

<i>A Lacanian Perspective</i>	星 久美子	20
-------------------------------------	-------	----

ロレンス研究文献		25
事務局からのお知らせとお願い		27
大会研究発表のための助成制度		29
和田静雄海外研究発表助成制度		32
大会報告		34
会計報告		40
『D. H. ロレンス研究』第34号原稿募集要項		44
会則		46
役員一覧		50
編集後記		52

特別寄稿

切齒扼腕日記より——プシュケーの悲劇

昨秋、『D. H. ロレンス研究——小説・思想・本文校訂』（慶應義塾大学出版会）を上梓し、長年の研究成果を一冊にまとめたことでそれなりにすっきりしたもの、悔しいことも多々あって、鬱憤を胸にかかえながら、自転車に乗ったり、スキーに行ったりしている。自分の情けなさを自ら嘔^{わら}うことで、気晴らしをしてみたい。

何と言っても、1番の後悔は、拙著第Ⅱ部「*Sons and Lovers* 論」の中核を成す第5章「*Sons and Lovers* と「生」」で大きな見落としをしたことである。実は、そもそものはじめから、この論文は屈辱にまみれている。皆さんは、Amazonのウェブサイトで見つけた新刊の英語文学研究書を次々にまな板に載せ、ぱっさぱっさと切ってゆく恐るべきレビュー Afterdawn 氏をご存じであろうか？ 歯に衣着せぬ舌鋒の鋭さで、貶す時はとことん貶し、褒める時にはきちんと褒める、めりはりをはっきり付けた尖鋭かつ洞察に満ちたレビューの書き手で、読めばただちに、並み並みならざる学識の持ち主であることもはっきり分かる。というわけで、わたしはひそかに畏敬の念を抱きながら彼のレビューを愛読してきたのである。われわれの仲間である木下誠の『モダンムーヴメントのD・H・ロレンス』のレビューに最高評価の5つ星が与えられ、次のような文章を読んだ時の喜びは忘れがたい。

私が今年これまでに読んだイギリス小説関係の研究書では、最高の収穫だった。小鳥遊書房がこれまで出した本の中で間違いなくベストワン。

木下氏は、ロレンスを中心に据えつつも、ウィリアム・モリスによるモダンムーヴメントの創始から、ベッチマン (Betjeman) を経て、美術史家ニコラウフ・ベヴスナーに至る20世紀モダニズムの流れを、壮大なスケールでたどっていく。ロレンスが『建築

評論』という雑誌に寄稿したのはなぜなのか、その雑誌はどのようなものだったのか、中編『セント・モア』主人公のイギリスとアメリカの往還は何を意味するのか、『チャタレー夫人の恋人』の最後の手紙でメラーズが語っていることは何であるのか——木下氏の論考は小さな疑問から出発して、それを巨大な文化史的文脈に拡大していく。実にスリリングで読者を飽きさせない。

おっしゃる通り！

ところが、ある日、Amazonのサイトをブラウジングしていて、Afterdawn氏の顎あごに粉々にくだかれた拙論を発見した。餌食になったのは、『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』所収のロレンス論「D・H・ロレンス『息子と恋人』のセクシュアリティと（ポスト）ヴィクトリア朝」である。

かなり弱い。・・・それなりに読ませるのだが、議論の帰結するところが拍子抜けなのだ。ロレンスは「性の思想小説家」ではなく「生の思想小説家」であった、「狭義の性ではなく、人の生の全体性の中で性を考察したという点において、セクシュアリティの偉大な思索家であった」（p.372）という結論。これ、仰々しく宣言するようなものじゃなくて、はるか昔から常識だったじゃないか？ たしか、リーヴィスが同じようなことをどこかで言っていた。

一生懸命書いたのに・・・でも、やはり、Afterdawn氏のおっしゃる通り。返す言葉がない。木下が90点で、武藤は20点、みたいな感じか。

歯噛みしながら、いつかロレンスと「生」についてAfterdawn氏にも感心していただけるような論文を書きたいと思っていたところに、『関東英文学研究』から特別寄稿論文執筆のお誘いをいただき、「*Sons and Lovers*と「生」」と題した論考を張り切って書きはじめたはいいものの、やはり勉強が不十分で、リーヴィスとは少し異なる「生」の系譜のスケッチめいたものを提示するに留まった。その上、生来のうっかり癖を最も大切な箇所で開催してしまい、論文を締めくくる*Sons and Lovers*の最終文の引用を間違えてしまった！ロレ

ンス研究者にあるまじき、娘の言葉を借りれば「ありえな〜い」誤りである。拙稿担当の査読者の方から指摘していただかなければ、赤っ恥をかくところだった（『関東英文学研究』第13号，2020年，1－8頁）。

というわけで、3回の試技の内2回を失敗して、瀬戸際に追い詰められた陸上選手の心地になっていた。

だから、これまでに書いたロレンス論を1冊にまとめた研究書を上梓する機会をいただいた時は、たくさん勉強して、思うぞんぶん加筆修正をほどこして、自分の *Sons and Lovers* 論のベストと言われるものを書き上げようと決意し、張り切って筆を起こしたのである。Denise Gigante の書いたロマン主義の時代の生命論研究 *Life: Organic Form and Romanticism* (2009) など、いろいろ面白い研究を見つけて、たくさん調べ直して、今度こそ書き誤りや書き漏れがないようにと70頁になんなんとする長大な論文を書き上げ、その質はともかく、努力の証として、敢闘賞くらいは貰ってもいいつもりでいたのである。

ああ、それなのに、それなのに！

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうして、ロレンスの研究書を書き終えた後、アリストテレスを詠みはじめたかと言うと、2022年はジョイスの *Ulysses* 出版100年で、その副主人公ステイーヴン・デダラスの思考にアリストテレスの影響が色濃いので、作品読解のための背景知識を深めようと思って、なんとなく彼の *ΠΕΡΙ ΨΥΧΗΣ*（『プシュケーについて』）を手にとったという経緯である。といっても、居直るわけではないが、もちろん、日本語訳で。そして、年金生活者の家計に一番負担の軽い講談社学術文庫版で。この版の邦題は『心とは何か』となっていて、他の訳も『靈魂論』（岩波書店旧全集版）、『魂について』（京都大学学術出版会版；岩波書店新全集版）とあるので、「やはり古典ギリシャ語のプシュケーというのは心とか霊とか魂のことなんだな」と、ある種の精神論だろうと思って、読みはじめた。

しかし、どうも様子がおかしい。先行研究を概観する第1巻には生物の話がたくさん出てきて、虫の体が切断された場合その切断された虫の体にも「心」があるとか、「植物の原理も一種の心である」（66頁）といった記述が出てくる。

第2巻で本論に入ると、

さて、この自然的物体は物体であるとともに、このような条件をそなえたもの、つまり、生命をもつものであるわけだから、心は物体ではないということになるだろう。すなわち、物体は・・・質料ということになるだろう。すると必然的に、心とは「可能的に生命をもつ自然的物体のいわば形相」ということになるだろう。・・・心はそのような物体の終局態である。（第2巻第1章、70頁）

これだけでは分かりにくいだろうから補足説明すると、自然の中にある物でもある生物の物の部分は質料であると考え、必然的に、心＝プシュケーは物でもある生物の形相、すなわち物に生命を与えて生物を成立させる生命原理であるということを主張しているのである。

つまり、ここでいう「プシュケー」とは、普通、日本語で、「心」、「魂」、「靈魂」と訳されるが、このアリストテレスの講義録本の記述においては、むしろ生命原理の意に近いのである。ケインズ『一般理論』に1箇所だけ3回出てくる（第12章）という動物精気^{アニマルスピリッツ}——これについてアメリカの経済学者が書いた『アニマルスピリット』という本（山形浩生訳）もある——にも繋がる話である。西洋哲学の古典中の古典『プシュケーについて』は生命論だったのか！

そして、そんなことも露知らず、えらそうに、わたしはロレンスの小説における「生」の系譜を記していたのか！？

あわてて、退職を記念して卒業生にもらった、「辞書のオックスフォード」に対抗して一昨年にケンブリッジ大学出版局が出した渾身の *The Cambridge Greek Lexicon* を調べてみると、ψυχή（プシュケー）の語義の冒頭に '1 life-force or animating principle, soul, spirit (of a person or animal)' と出てきた。それに続く2番目以降の定義でも 'lifeblood', 'life', 'life itself', 'one's very life', 'living soul' など「生」関連の語義が続出し、生命まみれの語であることが判明した。

それどころか、日本語版ウィキペディアにも「プシュケー」の項目があり、「古代ギリシアの言葉で、もともとは息（いき，呼吸）を意味しており，転じて生きること（いのち，生命），また心や魂を意味するようになった言葉である」と書いてあった。

ああ！万事休す！（ウィキペディアにも負けた！！）

悔しくて、情けなくて、死にそう！（というわけで、正月明けに3泊4日でスキーに行った。）

拙著『D・H・ロレンス研究——小説・思想・本文校訂』でできなかったことはもう一つある。ロレンスを他の作家・芸術家と比較して、暫定的な位置づけを試みるという営みの成果の収録である。これはちょっと趣味みたいなもので、特に3年に1度開催されていた北米ロレンス協会主催のD・H・ロレンス国際大会では、ロレンスをジョン・レノンと比べてみたり（ガルダ湖，2014年）、アガサ・クリスティの小説に出てくるロレンス文学への間接的言及を分析したり（シドニー，2011年）してきた。後者は、やはり今回と同じく編集委員会からの依頼により、『D・H・ロレンス研究』に「風刺される真摯な文学——アガサ・クリスティの中のD・H・ロレンス」（第24号，2014年，75-87頁）として寄稿した。この種の発表で、振り返ると一番恥ずかしく、かつ最もいとおしいのは、鈴木大拙が「即非の論理」と呼んだ仏典の論理とレトリックを参照してロレンスと仏教を比較考察しようとした、1990年代にノッティンガム大学で開かれた「ロレンスと言語」に焦点を当てた学会での発表である。私も若かった。大学の寮に泊まるのにD・H・ロレンス研究所所長のピーター・プレストン先生に荷物を持って案内していただいた記憶がある。たしか、内田憲男先生、北崎契縁先生と初めてお会いしたのもその時だった。恥ずかしいと思うのは、自分の無知を棚にあげてえらそうに仏教を語ったからである。愛着があるというのは、初めてロレンスを教えていただいた恩師海野厚志先生が禅に傾倒していたことから私自身も参禅体験があり、その体験にも繋がる非常に個人的なロレンス読解体験を発表に反映させたからである。狭く、つたなく、鈴木大拙や井筒俊彦の議論をとめどなく貧弱にしたような話だったが、2014年のイタリアの国際学会で、その場に居合わせた記憶

力抜群のポール・ポプロスキーがこの発表を覚えていてくれて、気恥ずかしいと同時に少し嬉しかった。

結局、とりあえず論文に仕立て上げたアガサ・クリステイ論にしても、何だか結論が曖昧で、満足できるレベルに達していないということで単行本への収録は見送ったものの、*D. H. Lawrence and Tradition* (ジェフリー・マイアーズ編, 1980) に掲載されたラスキン研究の泰斗ジョージ・P・ランドウのエッセイのような見事な比較論考をいつか書いてみたいとは思っている。日本でも、同様のアプローチとして、飯田武郎先生の日本英文学会大会招待発表「Mary Webb の小説における肉体と自然の力——同時代人 D. H. Lawrence と比較して」(日本英文学会第 80 回大会, 2008) は素晴らしかったし、稀代の名作家 A・S・バイアットへのロレンスの影響を論じた麻生えりか氏の発表も刺激的だった。ここでは、今、ロレンスとの比較で気になっている作品を 2 つほど、簡単に紹介してこの駄文を締めくくろう。

1 つは、ロバート・トレスルの小説『ぼろぼろズボンの慈善家たち』(Robert Tressell, *The Ragged Trousered Philanthropists*) である。ロレンスの『息子と恋人』は、労働者階級出身の書き手により同階級の内側から活写された労働者小説として名高いが、実は炭坑夫であった父親の労働体験とその家庭における反映が描かれるといった意味での労働者小説であって、主人公自身は肉体労働者としての勤労体験がなく、主人公に焦点を当てるとむしろ脱労働者小説であるのに対し、ほぼ同時期に書かれた『ぼろぼろズボン』は、イングランド南部ヘイスティングスで肉体労働者として実際に勤労・生活体験を持つアイルランド系イギリス人の手による真正の労働体験小説であり、とりわけ雇用の不安定さの構造分析に秀でている。同時期に書かれた、異なる視点から見た労働者小説として、この 2 作は対照的な面白さがある。『息子と恋人』が芸術的才能をそなえた主人公の成長に焦点が当てられることで労働者生活の問題点がぼやけてしまうのに対して、『ぼろぼろズボン』はそこを直視した労働者階級小説ということもできるし、地域の違い(イングランド中部と南部)や職種の違い(炭坑夫と建築内装業)に注目することもできるし、美, 生, 宗教性, 経済格差, 社会主義の問題といった同時代的な材料が異なった配置をされている作品として共通点と相違点の両方を比較してみることもできる。

1870年生まれのトレッスルは1900年代後半に当該作を書いて、自作の出版を見ることなく1911年に死去しており、遺族の尽力により短縮版が1914年に出版された。知る人ぞ知る労働者小説の隠れた名作として読みつがれ、1940年にはさらにペンギンブックスに収録されて、版を重ねた。その後、自筆草稿も発見されて、これに基づく無削除完全版が1955年に出た。ジョージ・オーウェルも労働者の現実を初めて描いたパイオニアとしてきわめて高い評価を与えている（‘The Proletarian Writer’, 1940; and ‘Review of *The Ragged Trousered Philanthropists* by Robert Tressall [sic], 1946）。サッチャーショックに揺れた1980年代には毎年ヘイスティングスの労働者教育協会で講演会が開催されていて、トニー・ベン（政治家）、レイモンド・ウィリアムズ（批評家）、ラファエル・サミュエル（歴史家）といった錚々たる面々の話が、*The Robert Tressell Lectures 1981-88*として本にまとめられている。日本語訳も、ほとんど知られていないのだが、『とんまの里』（村木淳訳、多摩書房、1971年）という邦題で読むことができる。先述した飯田武郎の研究発表からロレンスと併せてメアリー・ウェブも読むことの大切さが分かるのと同様に、『息子と恋人』を読むのであれば『ぼろぼろズボン』も併せて読まれたらいかがだろうか。見識が広がるのは間違いないし、新しい研究テーマが見つかるかも知れない。しっかりした解説と参考文献情報が付いたペンギン版が、古書でなら入手できるのでお勧めである。読みはじめると、最初はちょっと冗長な印象を持つかもしれないが、終盤はそれなりに盛り上がる。

もう1冊、最近、初めて読んだ本で、読みながらよくロレンスのことを思い出していたのは、1888年に出版され、100万部以上売れて、おそらく19世紀英小説最大のベストセラーと言われるハンフリー・ウォード夫人（あるいは今風には、メアリー・オーガスタ・ウォード）の『ロバート・エルズミア』（Mrs Humphrey Ward, *Robert Elsmere*）である。当時のあまりの人気ゆえか、世紀末、モダニズム期の作家に敵視され、近年はきちんとした版が手に入らなかったが、Victorian Secretsという名前は怪しげな出版社から、英文学者ミリアム・バースタインの手によるしっかりしたエディションが出ている。泰斗ジョン・サザーランドのウォード夫人伝もある。今読んでも面白いし、勉強になる。

この小説は伝統的なキリスト教教会制度と教義から脱してゆく時代の流れを描いた、多彩な登場人物に彩られたスケールの大きな物語で、19世紀イギリスにおける宗教的リベラルの脱キリスト教化の流れがよく分かるし、それが分かると、牧師ロバート・リードに宛てて自らの宗教的懐疑を記した1907年10月と11月の手紙や宗教的懐疑に陥った妹エイダへのアドヴァイスとして自らの非人格神信仰を述べた1911年4月の手紙などを経て1914年4月に‘But primarily I am a passionately religious man’とエドワード・ガーネットに宣言するに至るロレンスのスピリチュアルな遍歴の歴史的文脈に対する理解も深まる。『ロバート・エルズミア』の筋を簡単にまとめれば、英国国教会の牧師になった主人公が同時代の歴史的聖書批評に影響を受けて、牧師の職を辞し、かと言って、物質主義者・懐疑主義者として落ち着くわけでもなく、新たに、従来の教会制度の外に、より社会的な——ロンドン・イーストエンドの労働者支援を核とした——「新イエスの兄弟会」なる宗教的組織を作って、宗教的社会民主主義的方向へ向かってゆくという話である。マシュー・アーノルドの姪で、オックスフォードの社会自由主義哲学者T・H・グリーンの影響を受けたウォード夫人によって描かれる、19世紀の聖書批評、進化論、自由放任の経済政策による貧富の差の拡大などに起因する脱キリスト教制度の流れの影響は、何よりも従来の教会制度と教義を捨てた後に自らの世界観・人生観をどう修正・再構築するかという点において、後期ヴィクトリア朝人と20世紀初頭のモダニストたちに共有された大問題であったことがよく分かった。従来のキリスト教制度・教義が機能しないとすれば、そのどこをどのように変え、どこをどのように受け継いで自らの宗教性を守ってゆくかという問題を、モダニストたちはそれぞれが——T・S・エリオットのような最終的に復古主義を選んだ作家も含めて——それぞれのやり方で追及していったわけだが、彼らの営みは、その根幹においては、この『ロバート・エルズミア』で活写されている主人公の奮闘・遍歴と同じである。前述のトレッセル同様、美、生、社会、宗教性といった時代のキーモチーフの散りばめられ方も、モダニストたちと似ているところと違うところがあって面白い。

細かい部分で特に興味深いのは、英国国教会を捨てたロバート・エルズミアが最終的に三位一体の教義を否定するユニテリアン指導者の社会運動に近

づいてゆくところで、『息子と恋人』の終わり近くで主人公ポールが最後にミリアムを見かけて声をかけるのがノッティンガムのユニテリアン教会であるのを思い出して、キリスト教制度の中のリベラルな異端とも言えるユニテリアニズムがこの時代の英文学作品にこのように表象される意味が気になった。(ユニテリアンの個性は今でも残っているようで、ランカスター大の宗教学者ポール・ヒーラスとリンダ・ウッドヘッドらがその著書 *The Spiritual Revolution* (2005) においてイングランド北部の町の現地調査を通じて明らかにしたことの1つは、教会活動と併せてヨガなど脱キリスト教的・ニューエイジ的なスピリチュアルな身体活動に熱心に参加するのはユニテリアン派が多いという事実である。) 逆に、ユニテリアンの家系に生まれた T・S・エリオットの「アングロ・カソリック」宣言は、これと表裏一体を成す確信犯的な復古と言えようか。英米の近代化においてユニテリアンが果たした大きな役割は京都賞受賞の碩学チャールズ・テイラーの西洋近代思想史の大著『世俗の時代』でも強調されている。

その他にも、『ロバート・エルズミア』冒頭に描かれるイングランド北部湖水地方の自然に囲まれた前近代的な村落共同体とその近代化などは『息子と恋人』冒頭を想起させるし、2人の違ったタイプの姉妹がそれぞれの男性関係を通して異なる人生を切り開いてゆく展開は『恋する女たち』を思い起こさせるし、ロレンス研究者は彼の先駆者としてジョージ・エリオットやハーディやメレディスは読むとしても、なかなか『ロバート・エルズミア』にまでは手が回らないだろうが、それでも、このウォード夫人の小説を読めば、ロレンスの『息子と恋人』から『羽鱗の蛇』に至るまで、彼のさまざまな作品が、大きな歴史的視点に立てば、ヴィクトリア朝後期の大ベストセラーの変奏であることが確認できる。

最後に、話を戻そうか。アリストテレスには激甚なショックを受けたけれども、それでも『プシュケーについて』の記述を通して、師プラトンの理想主義を一見ぱっきりと否定しながらもどこかでそれを引き継いでゆくアリストテレスの方法を目の当たりにすることができて、とても勉強になった。次は『ニコマコス倫理学』と『形而上学』を読もうと思って、注文したら早速

届いたので、今、前者を読みはじめたところである。「少年老い易く学成り難し」でこの年になっても読むべき本の多さと読んだ本の少なさに呆然とすることはしょっちゅうだけれども、やはり読んでみると面白い本は山ほどあるし、こうして自分の失敗談を書きつづけてゆくと、失敗を通して学ぶことがあるのも分かって、スキーに行くことばかり考えている場合じゃないという現実が身にしみてくる。ロレンス協会のような学会に入って勉強仲間恵まれているのだから、学ぶことをつづけていかなければ、いやそれを楽しんでいかなければいけない。と同時に、いろいろ面白い本を探して、ロレンスとともに國分功一郎の『中動態の世界』なども読むと、「いかなければいけない」という発想の限界も学んでいかなければいけないことが分かってくる。そして、中動態をきちんと知るためには、やはり古典ギリシャ語を学ばなければならないということも分かってくる（やれやれ）。しかし、古典ギリシャ語ができるようになれば、ここに記した「プシュケーの悲劇」を繰り返さずにすむようになるかもしれない。そうできるようになるかどうかよく分からないけれども、まあ何とかなるだろうと思って、（ここからは自らに向って言うべきところを、無責任に、外に転じて発するわけだが、）皆さん、これからも、老いに抗して、あるいは他の仕事の忙しさ、雑事の忙しさに抗して、あるいは人それぞれ違うであろうそれぞれの逆境に抗して、がんばって、しかし、がんばり過ぎずに、それぞれのペースで勉強をつづけてまいりましょう。無理のない範囲で、無理してまいりましょう。

書 評

Catherine Brown and Susan Reid (eds.),
The Edinburgh Companion to D. H. Lawrence and the Arts.
Edinburgh University Press, 2020.

本書は、エディンバラ大学出版から続々と刊行されている啓蒙的な「文学と人文学必携」シリーズの中の、「～（個別作家や文学流派や文学ジャンル等）と諸芸術」と題された意欲的な論集企画のひとつである。2022年末時点では「ロマン派と諸芸術」が最新刊のようだ。ロレンスと活動時期が重なる個別作家としては、これまでヴァージニア・ウルフ、サミュエル・ベケット、T. S. エリオット、エズラ・パウンドらが「～と諸芸術」論集の企画に取り上げられている。ジェンダー・出身地・活動場所・階級等の観点で絶妙に配慮された人選（イングランド上層中流階級の女性、アイルランド生まれやアメリカ生まれでヨーロッパ（大陸）行き、労働者階級出身の男性で放浪 etc.）とも思われる。コスモポリタンなモダニストとして括られてきた20世紀前半のモダニストたちの活動は、あらためて文学以外の「諸芸術」とのかかわりという時間的にも空間的にも拡張されたコンテクスト／パースペクティブにおいて再考される。その結果、個別作家研究としてだけでなく、むしろモダニズム研究全般としてのあらたな可能性を探りながら、モダニズム文学・文化そのものの境界の再定義を促す。この傾向は、エジンバラ大学出版の当シリーズに限らず、他の大学出版や大手出版社による「必携（Companion）」「導入（Introduction）」シリーズにも顕著である。単著・共著のモノグラフならばたとえばブルームズベリー出版からの New Modernisms シリーズなども、21世紀アメリカ発（PMLA 発）の New Modernist Studies に対するトランスアトランティックな目配りをした英国からの応答となるだろう（著者に Marina MacKay や Peter J. Kalliney などの名前が目につく）。

複数形のあらたな Modernisms すなわち「さまざまな」モダニズム／モダニズム研究の新潮流。その波はロレンス研究にも確実に押し寄せている。『ロ

『ロレンスと諸芸術』論集はまさにそうした実例である。執筆者の顔ぶれには、長年にわたってロレンス研究を牽引してきた馴染みの「ロレンス研究者」の大御所や中堅どころに加えて、広くモダニズム研究・近現代イギリス文学研究全般に刺激を与えている批評家たちが並ぶ。Peter Childs, Sarah Edwards, Vincent Sherry, Hugh Stevens, Jeremy Tambling, David Trotterなどである。なかでもTrotterの「テクノロジー」の章は、これまでの彼の優れた著作と合わせて読まれるべきものである。

論集全体は3つの部で構成される。分量的に論集のほぼ半分を占める第1部は「美学」と題されて次のような12章を含む——「美的なものという概念」「総合芸術 (*Gesamtkunstwerk*)」「ロマン派, デカダンス, 歴史」「ナショナル／人種の美学」「伝統的な美学」「翻訳」「聖書的美学」「歴史記述とライフ・ライティング」「クィア美学」「政治と芸術」「ポピュラー・カルチャー」「テクノロジー」。第2部の「美的諸形式」は3つのセクションに分かれる。セクション1の「言語による諸芸術」は、ロレンスによる小説と詩の創作行為と批評行為の議論に加えて、推敲・改訂作業についてのたいへん興味深い章を含む3つの章。セクション2の「パフォーマンスの諸芸術」は、劇, 音楽, ダンスなどを4つの章で扱う。セクション3「視覚的諸芸術」の5つの章は、絵画の創作と批評だけでなく、ブック・デザイン, 彫刻, 建築, 衣服とジュエリーといった、これまであまり取り上げられてこなかった領域を論じており貴重である。そして最後の第3部「他者たちの芸術におけるロレンス」の4つの章は、ときにポストモダンに(メタ)フィクション化される伝記としてのバイオフィクション, 音楽, 21世紀の映画などに表現されたロレンス(像)とともに、記号論者のC. S. パースに触れながらアイコンとしてのロレンスが論じられている。

以上の全28章は、読み手のロレンスへの関心に合わせてどこからアプローチしても有益な議論・情報に触れられるわけではあるが、それでも序章にはNew Modernist Studiesへの目配せ的な言及もあり、ロレンスの「諸芸術」とのかかわりを探究する本論集の企図全体としては、なによりも「あらたな」モダニズム(ズ)文化論の批判的コンテクストで読まれるであろう。編者のひとりのSusan Reidは、すでに本誌で書評された著書の*D. H. Lawrence*,

Music, and Modernism (Palgrave Macmillan, 2019) において、音楽という「諸芸術」のひとつを起点にロレンスの文学とモダニズムとの関係を意欲的なモダニズム文化論として発信しようとしていた。

リベラリズムとモダニズムとの関係から議論を始める *The Great War and the Language of Modernism* (Oxford UP, 2003) を執筆し、*The Cambridge History of Modernism* (Cambridge UP, 2017) の編者をつとめるなど、これまで優れたモダニズム論を展開してきた Vincent Sherry は今回、「変幻自在なロレンス (the protean Lawrence)」という『ロレンスと諸芸術』の基調低音をなすともいえる、いわば「リベラル」なロレンス像 (イメージ) を打ち出す。「作者ロレンスを表現するためのわたしたちの批評的修辞は、変化するさまざまな形式の創造主である神から、自らが身を置く場の色に合わせて自らの色を変化させる創造物 (the creature) へと、結果的に移行することになるだろう。そう、カメレオンである。そしてそれが身を置く場は、歴史的なもの (historical) である」(39)。もはや創造する神としての作者ではなく、創造物「カメレオン」としてのロレンス (像)。こうした変化を意識する批評的コンテクストが『ロレンスと諸芸術』にはあるのだから、最後の第3部「他者たちの芸術におけるロレンス」の4つの章が、バイオフィクションや音楽や映画や広告を含むヴィジュアル・アートなどの新旧「諸芸術」を通じていまま書き換えられ創り変えられ続けるロレンス、すなわち「創造物」として「変幻自在な」ロレンス像を追っているのは、必然なのである。

こうした「批評的修辞」としての「カメレオン」ロレンス像に、第10章の Howard J. Booth の次のような言葉を加えたら、『ロレンスと諸芸術』論集の方向性がさらにみえてくるだろう。「ロレンスと政治の関係をめぐるかつての批評には、彼のポジションとメッセージは慣例に従った文学形式とライティングのスタイルを使って提示される首尾一貫したものだ、という前提があった。しかしそれは端的に言って、こんにちの批評家が実践するロレンスの読み方ではない」(129)。強調されるのは、ロレンスに向かう研究者たちの姿勢、テキストへのアプローチの変化である。ここでは、かつての「首尾一貫したものだ、という前提」が、Sherry がいうところの「歴史的なもの」としての批評的「場」に相当してくる。そして Booth が従来政治的 (新旧)

右左のラベル貼りを再検討したのちに最終的に評価するのは、1920年代前半以降のロレンスの「より開かれた探究のプロセスの(exploratory)さまざまなライティングの形式とスタイル」であり、「わたしたちがラーナムやリーダーシップといった慣習的な政治ラベルを再配置する議論から距離を置いたならば」見えてくるはずの、左にも右にも収まりきれない「ユートピアを切望し続けた探究(exploration)の軌跡」となる(142)。

はたして Sherry がいうような「変幻自在なロレンス」の条件＝「場」としての「歴史的なもの」は、ロレンスが生きたそれなのか、それともロレンスを読むわたしたちが生きてそれなのか、「リベラル」なのはロレンスなのか、それともロレンスを読むわたしたちなのか——そうした問いを忘れずに「変幻自在なロレンス」のカメレオンの変幻自在性のさまざまなヴァリエーションを全28章(のいくつか)に辿れば書評としての役割は十分、などという考えは、しかしながら、あいかわらずの能天気な(uncritical)「リベラル」なのかもしれない。そう思われる本を、2022年末にご恵贈いただいた。本誌の現編集委員長の高田英和氏と本協会員の大田信良氏と本協会退会後も大会シンポジウム等に登壇くださっている井川ちとせ氏とを編著者に含む『ブライト・ヤング・ピープルと保守的モダニティ——英国モダニズムの延命』(小鳥遊書房、2022年)である。以下は、高田氏による「はじめに」からの引用である。

ここまで言えば、いや、言わなくても、もうそろそろ、われわれは、意識、無意識にかかわらず、(1920年代をも含めて1930年代から今現在までの)あらゆる事象と問題を、リベラリズムあるいはリベラル史観のうえで、考え、戯れるということを、本気でやめても、すてても、良いのではないだろうか。というのも、それが、つまるところ、「モダニティ」(近代性)の名のもとに(その自由主義をも含めて)個人主義と資本主義を推し進め、と同時に、たとえば、極めて特異な事象・現象としての、自助努力と自己責任、および、格差と二極化を、自然視、自然化し、われわれが生きづらい「社会」と文化にした／しているのだから、いい加減、次のステップ、ステージに進んでも良いはずだ。本書の、各章の論文は、すべて、これらのことを前提にして書かれた

ものであり、そのようにして書かれている。(15)

この理想的なまでに統一された編集方針および実践結果の高らかな表明のポイントは次のとおりと理解する——「リベラリズムあるいはリベラリズム史観のうえで、考え、戯れる」批評行為による「英国モダニズムの延命」(副題)こそが、「われわれが生きづらい「社会」と文化にした／している」ネオリベラリズムを推進させているのだ、という問題提起、(わたしが致命的な読み落としをしていないならば)それ自体再検討の余地がない所与のものとして示されているリベラリズム(批評の)批判である。

高田氏は別の章で、わたしが上に名前を挙げておいた Marina MacKay による *Modernism and World War II* (Oxford UP, 2007) を、「あくまで、事例の一つで、Mackay[sic]に限らず、」(120)と断りつつ次のように批判する。「Mackay[sic]は、真正な「英文学」研究の探究は「モダニズム」文学研究のそれにこそあり、そして、それは「リベラリズム」の推進とセットであるということを、重重に承知していて、でも、あえて、そのことにはふれずに、その関係性を不可視化させ続けることで、この一昔前からの関係性、その正当性を、今一度強固なものにしようとしているのだろうと。(中略)何を極端なことを言っているんだと思われる方も居るかもしれないが、居ないことを望むんですけど、Mackay[sic]の文学研究を「正しい」ととらえることが、詰まるところ、リベラリズムを推し進め、そして、それは、たとえば自助努力／自己責任／格差の、社会なき「社会」すなわち文化が形成されることに繋がっているのではないかと、わたしには、思われるからなのである」(117-18)。あえて補足するまでもないが、「社会なき「社会」すなわち文化」というフレーズにおける「社会」と「文化」の言葉遣いは、レイモンド・ウィリアムズの「田舎と都会」論を含む「文化と社会」論全体の延長線上にある。その視座からのリベラリズム(批評の)批判であると理解する。

こうした「わたし」高田氏個人の言表と認識が「われわれ」共著者間で共有されていることは、大田氏が最後の一押しとして、「おわりに」の章の実質的締めとなる一文で保証する。一人称複数形の主語を使いつつ、そして「新たに中流階級化する個人たちをターゲットにしたような、モダニティ論の古びた概念」への「回帰」による「英文学の再制度化」を批判しながら——「で

あればこそ、われわれは、大衆化時代の英国若者文化を、モダニティ論によって、再解釈したりは、しない」(226)。このように使われる「われわれ」の排他性（それは大田氏独特の、と同時に高田氏も差異をともないつつ共有する、そして大田氏から多くを学んできたわたしの文体にも一部転移している、読点の多用で強調・分節化されると思われる）と、その他方にある未来に向けた潜在的な包括性、とのあいだの矛盾・軋轢あるいはそれがもたらす疎外の感覚（すなわち、わたしは「われわれ」のひとりになれるように読み進めながらも、「われわれ」のひとりではないと直にではなくとも暗に名指され差異化されているという感覚、というのも、わたし木下は、「わたし」高田氏＝「われわれ」が具体的な分析なしに——「はじめに」の本文中ではなくて註における次のような言及だからそうなるのか——「反リベラルという視点を、リベラル史観に回収し」「リベラルな「正しさ」を前提にして全体を構成している」（16 下線は引用者）と難ずる中央大学人文科学研究所編『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』（2018年）の執筆者のひとりなのだから、そして「それとは趣きが異なっている」「唯一、最後に収録されている論考」（16）の執筆者——例外的な「われわれ」のひとりであってその人の名前はあげられていない——ではないのだから。）こうした一人称複数形の使用における、わたしもそのひとりである〈非われわれ〉を呼び出すしかない必然的な二律背反性とその帰結こそ、モダニティ論の核心というか問題とされるモダニティの表象そのものだと考えたら、わたしは大田氏の問題提起を誤読していることになるだろうか。

リベラリズムからネオリベラリズムへと続く流れがかようにも強固ならば、まさかその「外」や「メタ」に立つ安全なポジションに身を置いて、高田氏の言葉を借りると、「反リベラルという視点を」を保持し続けたりなどできないだろうし、「リベラリズムあるいはリベラル史観のうえで、考え、戯れ」ているような「『英文学』とその『研究』は、もう、終わって／死んでいる」（121）などとの断罪もできないだろう。ところで、わたしは遅ればせながら（というのも SNS 等をまったく利用しないので）「キャンセル・カルチャー」という、「われわれが生きづらい」「社会なき「社会」すなわち文化」をめぐる応酬を最近知ったが、高田氏の「もう、終わって／死んでいる」言説と、彼の「は

じめに」の註の「リベラルな「正しさ」を前提」言説（すなわち言表内容そのものよりもむしろ言表スタイル）とを合わせると、「キャンセル・カルチャー」に類するネオリベラル文化ゆえの問題含みのやりとりに発展してしまわないのだろうか。これは修辞疑問文ではなくて、SNS等の「文化」に無知なわたしが発する字義どおりの疑問文である。ちなみに同じことを、「2021年度の、日本の、ある大きな英文の学会、その本部・本店での、20世紀のシンポジウム」への言及のしかた・作法にも感じた（118-19; 特に119のカッコのなか）。高田氏はその主張の内容だけでなく言表スタイルとしての文体をとおしてパフォーマンスにも、こうしたわたしたち（誰？）がどっぷり浸かっているネオリベラリズムの現在の「社会なき「社会」すなわち文化」について考えるべきだと教えてくれる。

わたしの立場は、Vincent Sherryがいう「変幻自在のロレンス」、創造主ではなくて「創造物」カメレオンとしてのロレンス（像）を是とするものである。そして拙著（モダンムーヴメント論の単著）も含めた現時点までのわたしの関心は、リベラリズムの強固さを跡づける（まずはその作業が十分ではないと考えている）ことにある。それははたして、「英国モダニズムの延命」にすぎないのだろうか。クリティカルな意識が足りないのだろうか。「もう、終わって／死んでいる」のだろうか。エジンバラ大学出版からの『ロレンスと諸芸術』論集は、ロレンスの多面性に光を当てており、ロレンス研究者に有益な刺激となることを書評執筆者として保証する。そのうえで、「いい加減、次のステップ、ステージに進んでも良いはずだ」との呼びかけに応えるにはあまりに準備が整っていない者として、そして国公立大学とはまったく異なる教育・研究環境の問題を抱えた不安定ないわゆる中堅私立大学の英文学科に勤務しつつそのコンテクストとともに研究成果を細々と発表し続ける者として、本書評の執筆は『ロレンスと諸芸術』論集の間口の広さが「英国モダニズムの延命」なのかどうか、『ブライト・ヤング・ピープルと保守的モダニティ——英国モダニズムの延命』と併読しつつ、「英文学」の「再制度化」ではない「イングリッシュ・スタディーズ」の立ち上げの可能性について考えさせられる経験となった。

（木下 誠）

Ben Stoltzfus.

D. H. Lawrence's Final Fictions: A Lacanian Perspective.

Lexington Books, 2022.

本書の著者であるベン・ストルツファスは、カリフォルニア大学リバーサイド校の名誉教授である。彼は多才な人だ。研究者に留まらず、小説家、翻訳家、詩人の顔を持つ。そして、非常に多作だ。これまでに、研究書を12冊、翻訳書を2冊、長編小説を6冊、短編集を2冊、妻で画家のジュディス・パーマーと共作したビクトノヴェル絵小説、画家のアーリー・キルヒナーと共作したグラフィック・テイル絵本などを出版している。目下、新しい小説を執筆中らしい。しかも、守備範囲が広い。研究書の出版目録を見ると、アラン・ロブ・グリエ、アンドレ・ジード、アーネスト・ヘミングウェイ、ルネ・マグリット、ジャック・ラカンなどが並ぶ。その上、複数の言語——英語は言うまでもなく、ラテン語、フランス語、ドイツ語など——を自由に操る。

12冊目の研究書となる本書は、彼の長年に渡るロレンス研究の集大成である。筆者は、イントロダクション「序論」の前半、“A Prelude: Cultural Dysfunction”と題された箇所でも感動してしまった。著者曰く、この箇所は『ヤマアラシの死をめぐっての随想』(*Reflections on the Death of a Porcupine*)におけるロレンスのおおらかな書き方や『黙示録』(*Apocalypse*)における彼の切迫感を模倣しようとしたらしい。その冒頭では、20世紀の諸問題——産業革命が人々の生活に与えた影響、生産過程の機械化、自己・他者・社会からの疎外感など——について強い危機感を持っていたロレンスが生きていたら、21世紀の諸問題——科学技術革命、機械化による問題、動植物種の絶滅、地球温暖化など——に憤慨するだろうし、数多くの戦争——ムッソリーニのエチオピア侵攻、第二次世界大戦、イラン・イラク戦争、イラン、アフガニスタン、ウクライナでの戦争、テロリズム、シリア、イエメン、アフリカでの内乱など——に震え上がったはずだと語る。ここからは、著者自身の21世紀の諸問題への切迫した危機感と重なって、鬼気迫る強いメッセージが伝わってくる。文学研究は今日的になり得るのだ。

著者が解決策として着目するのは、『黙示録』におけるロレンスの最後の言葉——「太陽から始めよう、そうすれば、あとはゆっくり、ゆっくり起こるだろう」(“Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen”)である。ちなみに、これは本書の最後の言葉でもある。著者はこれを太陽の光を全身に浴びて自然とつながることができれば、「意識」(mind-conscious)に圧迫された「血の意識」(blood-consciousness)を復活させることができ、それができれば生き残ることができるというロレンスの考えを反映していると解釈する。そして、その生き残りの成否を描いているのが本書で考察するロレンスの最後の5年間に書かれた7作品——「太陽」(“Sun”),「もの」(“None of That”),「木馬の勝者」(“The Rocking-Horse Winner”),「島を愛した男」(“The Man Who Loved Islands”),「喜びの幽霊」(“Glad Ghost”),および中編2作——『馬に乗って逃げた女』(*The Woman Who Rode Away*),『逃げた雄鶏』(*The Escaped Cock*)——であると著者は言う。

本書では、これらの作品をラカンの精神分析の視点から読み解いていく。と言っても、よくありがちなラカンの理論を利用した、恣意的な文学作品の読解とは機を逸する。ロレンスとラカンの思想・思考の類似性——文化的な異常事態の破壊的な影響に、「精神と身体、意識と無意識をつなげる」(8)ことで対処しようとした——に基づいた本質的な論考となっている。実際には、ラカンに加えて、フロイト、ソシュール、バルト、デリダ、フーコーなどが総動員されている。

では、各章を見ていこう。第1章——“Sun” : Writing the Iceberg with Lawrence and Hemingway——では、「太陽」におけるロレンスの寓話的な書き方をヘミングウェイの「冰山理論」(iceberg theory)やそれを利用して『異邦人』(*L'Étranger*)を書き、バルトの『零度のエクリチュール』(*Le Degré zéro de l'écriture*)の中で無垢で無彩色であると評されたカミュの書き方と比較する。著者が考えるロレンス流の「冰山理論」とは、氷山の下=物語において語られていない部分は同時期に書かれた哲学的^{エッセイ}随筆——「太陽」の場合は、『ヤマアラシの死をめぐる随想』、『エトルリアの遺跡』、『黙示録』など一で語られているというものである。考察の結果、著者は、「太陽」における表面の語りでは、主人公ジュリエットがうまくいっていない結婚と都会

の環境が原因で煩った病から太陽を浴びて治癒する様子が描かれているが、その下には現代人の自己や宇宙からの疎外と古代の太陽崇拜・男根崇拜による再生という主題が隠されていると結論づける。

第2章——*The Woman Who Rode Away: Madness and Cosmic Sanity*——では、第1章に引き続き、『ヤマアラシの死をめぐる随想』、『エトルリアの遺跡』(*Sketches of Etruscan Places*)、『黙示録』などを参照しながら、『馬に乗って逃げた女』を読み解いていく。「太陽」のジュリエットと同様、『馬に乗って逃げた女』の主人公も、夫と夫が代表する産業化した世界の狂気から距離を置き、宇宙に内在する官能的意識や古代の身体知を呼び起こす。著者によると、太陽を浴びる瞬間、両者はラカンの金言——「Esがであったところに、私はあらねばならない」(*Wo Es war, soll Ich werden*, “Where It was, there I must be”)——を体現していると言う。言い換えると、無意識(*Es=It*)が意識(*Ich=I*)とひとつになって、自己のバランスを回復した瞬間ということになる(51)。一方、ジュリエットは生き延び、「馬に乗って逃げた女」は生け贄となって死ぬという違いについては、後者は、『羽毛ある蛇』(*The Plumed Serpent*)のケイトと同じように、現代に起こった宇宙の不均衡を回復するための人類による贖罪を表しているという解釈が示される。

第3章——“None of That”: Lawrence and Hemingway at the Bullfights with Ethel and Brett——では、再びロレンスとヘミングウェイを比較する。共通点は、1920年代の新しい女と闘牛である。ロレンスは「もの」でメキシコ人闘牛士クエスタに惹かれるエセル・ケインを描き、ヘミングウェイは『日はまた昇る』でスペイン人闘牛士ロメロに恋するブレット・アシュレイを描いたが、両者の行く末は異なっている。エセルがクエスタの策略にはまってレイプされ、死に追いやられる一方、ブレットは性的不能なジェイクに戻っていく。エセルの悲劇はロレンスが考える理性と肉体の二元論の機能不全を具体化しており、ブレットとジェイクの関係はヘミングウェイが追っている「文明の失敗が引き起こした社会的・精神的な結果とその第一次世界大戦の生存者への影響」を表現していると著者は解釈する(66)。

第4章——“The Rocking-Horse Winner”: Pleasing the Mother——は、筆者にとっては、本書の中で最も難解な章であった。著者は、この作品で主人

公の少年ボールが母親を喜ばせるために一心不乱に木馬に乗り、競馬の勝ち馬を予想し、お金を儲け、挙げ句の果てに死んでしまうのは、「反復強迫」(repetition-compulsion)の悲劇的な結果であると解釈する。とくに「運のある人」(lucker)と「金」(lucre)の言い間違えに着目し、それについてフロイトの「機知——その無意識との関係」("Jokes and Their Relation to the Unconscious"), ラカンの「無意識における文字の審級、あるいはフロイト以後の理性」("The agency of the letter within the unconscious or reason since Freud"), さらにバルト、ソシュール、デリダを参照しながら詳細な分析を行っている。

第5章——“The Man Who Loved Islands”: A Return to the Womb——でまず興味深いのは、作品名に(ラカンの思想の試金石となった)ソシュールの言語学とフロイトの理論が埋め込まれているという指摘である。つまり、「私の島」("I-lands")を愛するというのは、分裂した自己に留まること、ラカンのいわゆる「鏡像段階」(mirror stage)における「分裂化」(*Spaltung*, *splitting*)をまねる分裂を意味していると言う。その上で、この作品はラカンの精神分析の概念を再現しているとし、主人公カスカートが第一の島で物や金などを捨てるのは象徴界における「ドクサ」(*doxa*)の拒絶であり、第二の島で愛を捨てるのは想像界における他者との関係での自己定義の失敗であり、第三の島で生命を捨てるのは現実界における死との無意識の関係を表していると考察する。

第6章——“Glad Ghosts”: The Cure——Cutting Through the Tangle——は、これまで評価が低く、超自然、オカルト、不気味なものの物語として読まれてきたこの作品を、ヒステリーに関する物語として読む。幽霊が出没するというラスキル家の屋敷に集う人々——ラスキル夫人、ラスキル卿、カルロッタ、ヘイル大佐、ヘイル夫人——は、彼らが属する階級の慣習や既成概念などといった「ドクサ」によってがんじがらめにされ、ヒステリー、つまり身体的機能不全の症状が現れている。語り手であるモーリアは、「談話療法」(talking cure)によって、その「もつれ」(tangle)、ラカンが言うところの「結び目」(knot)を断ち切り、彼らが抑圧された自己から解放されるのを助ける。真夜中に幽霊がモーリアを訪れる場面は、無意識($E_s = I_t$)と

意識 (*Ich=I*) の調和を表していると主張する。

第7章——*The Escaped Cock: Salvation*——では、『逃げた雄鶏』はイエスキリストの復活後の人生における「父の法」(Law of the Father) の拒絶を描いており、その過程における抑圧されたセクシュアリティと欲望の物語はラカン理論の基本的な考え方を再現しているという解釈が、テキストの隠喩、^{メタファー}換喩、^{メトニミー}提喩、^{シネクドキ}同音異義などを読み解きながら示される。物語のクライマックスではエディプス・コンプレックスに比する神秘的な統合のイメージが示されるが、人間となったキリストは、去勢される代わりに、男性性を取り戻し、象徴的に母親を所有し、太陽のほうへと上っていくと言う。

このように、ロレンス晩年の7作品の主人公を見てくると、「太陽」のジュリエット、「喜びの幽霊」のモーリア、『逃げた雄鶏』のキリストは生き延び、『馬に乗って逃げた女』の主人公、「もの」のエセル、「木馬の勝者」のポール、『鳥を愛した男』のカスカートは死んでいく。この違いは、前者が無意識と意識を融合させるのに成功したのに対して、後者は失敗したことにあると著者は言う。ラカンは「無意識は私のために何をのぞんでいるのか」と問い、「無意識が意識を照らせるように、無意識のメッセージを聞き入れろ」と答えた(132)。われわれ現代人にとって、それは難しいかもしれない。だから、「太陽から始めよう」なのだ。

本書は、ラカンの精神分析理論に精通しているとは言えない筆者にとっては、細部の議論は難しいところも多かった。しかし、各章における著者の主張は明瞭で、ロレンス晩年の7作品への理解を深めることができたと思う。

(星 久美子)

ロレンス研究文献

(2021年9月～2022年8月)

(日本在住の研究者あるいは国内出版の英語文献)

Kamiishida, Reiko, (書評) “Kumiko Hoshi, *D. H. Lawrence and Pre-Einstein Modernist Relativity*,” 『D. H. ロレンス研究』 第31・32合併号 (日本ロレンス協会), 2022年3月.

Kuramochi, Saburo, (論文) “D. H. Lawrence’s *Paul Morel*: The Dual Character of the Heroine,” *Otsuka Forum* 39 (大塚英語教育研究会), 2021年12月.

(日本語文献)

浅見廣子, (書評) 「John Turner, *D. H. Lawrence and Psychoanalysis*」, 『D. H. ロレンス研究』 第31・32合併号 (日本ロレンス協会), 2022年3月.

麻生えりか, (書評) 「Marie Géraldine Rademacher, *Narcissistic Mothers in Modernist Literature: New Perspectives on Motherhood in the Works of D. H. Lawrence, James Joyce, Virginia Woolf, and Jean Rhys*」, 『D. H. ロレンス研究』 第31・32合併号 (日本ロレンス協会), 2022年3月.

板谷洋一郎, (書評) 「中央大学人文科学研究所編『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』」, 『D. H. ロレンス研究』 第31・32合併号 (日本ロレンス協会), 2022年3月.

加藤彩雪, (論文) 「D. H. ロレンスの『やさしい』個人主義—人間・自然・動物との関係をめぐって」, 『大妻比較文化: 大妻女子大学比較文化学部紀要』 第23号 (大妻女子大学比較文化学部), 2022年3月.

近藤康裕, (翻訳) 「藝術と道徳家: D.H. ロレンス氏の作品」, 『教養論叢』 第143号 (慶応義塾大学法学研究会), 2022年2月.

高畑悠介, (論文) 「D.H. ロレンス 『虹』—他者性と視点の扱いから見る世代間の相違」, 『テキスト研究』 第18号 (テキスト研究学会), 2022年3月.

田部井世志子, (論文) 「D・H・ロレンスへの誘い—愛が不毛な悲劇的時代に

- おける『へそ曲がりな』ロレンスの現代的意義」, 『北九州市立大学文学部紀要』第92号(北九州市立大学文学部比較文化学科), 2022年3月.
- 中林正身, (書評)「Elliott Morsia, *The Many Drafts of D. H. Lawrence: Creative Flux, Genetic Dialogism, and the Dilemma of Endings*」, 『D. H. ロレンス研究』第31・32合併号(日本ロレンス協会), 2022年3月.
- 森岡稔, (論文)「D・H・ロレンス『恋する女たち』をユング心理学で読み解く(5)『聖なる結婚』を求める『象徴』の行方」, 『サイコアナリティカル英文学論叢』第42号(サイコアナリティカル英文学会), 2022年3月.
- 横山千晶, (書評)「木下誠『モダンムーヴメントのD. H. ロレンス』」, 『D. H. ロレンス研究』第31・32合併号(日本ロレンス協会), 2022年3月.

日本ロレンス協会第 53 回大会報告 (2022 年 6 月 18 日オンライン開催)

【研究発表 1】

『息子と恋人』における病いと語り

井上 麻未

本発表では D.H. ロレンスの小説『息子と恋人』(1913)における病いと語りに焦点をあて、本作品において病いがいかに語られているかを考察した。「病いの語り」を通して病いの経験が世界的に注目されるようになった発端は、文学が重要な役割を担う medical humanities という米国発の医学教育を中心とする教育運動であった。現在、medical humanities を前身とする health humanities が新分野として主に英国で発展を遂げている。これらの研究を踏まえて、Peter Fifield が *Modernism and Physical Illness: Sick Books* (2020) において、モダニズム小説における“the role of physical illness”を論じた。医学からの視点だけでは捉えきれない「病い」というテーマを medical humanities/health humanities の視点から文学研究の手法で探るという試みは既にヴィクトリア朝小説研究において進んでいるが、モダニズム小説に関する同テーマの研究は未だ十分ではない。そこで、本発表では最愛の母親をケアし看取る息子、ポール・モレルの語りはまさに社会学者 Arthur W. Frank が『傷ついた物語の語り手』で提示する「混沌の語り」であり、小説の最後の場面は「混沌の物語」がやがて言語化された物語へと転換していく可能性を示唆していることを論じた。『息子と恋人』をはじめとするロレンス小説を 20 世紀初頭の「社会的・医学的・歴史的な文脈」に置き、病いと語りという視点から読み返すことで、新たな読みの可能性が開かれることを明らかにした。

【研究発表 2】

Aaron's Rod の Spirituality—出版 100 周年を祝して

武藤 浩史

Aaron's Rod 出版 100 年を祝して、この小説のスピリチュアリティ (霊性) を論じた。

D. H. Lawrence にとって Spirit とは、1 つには霊肉二元論の一項であり、と同時に、この霊肉二元論を脱臼させる「聖霊 the Holy Spirit」でもある。しかし、*Aaron's Rod* においては、キリスト教的と呼び得るこれら二つの用法とは異なる、新たな意識、新たな使い方が見られる。

Spirit の語源はラテン語の Spiritus だが、この Spiritus の原義である「呼吸」そして「空気の動き」を意識しつつ、身体的なスピリチュアリティを核とする新思想をここから展開しているように思われるのだ。そもそも、小説の設定の中核を成す主人公の愛奏楽器フルートが息を吹き込むことで音楽を作る道具だが、*Aaron's Rod* においては、それ以外にも、魂を呼吸になぞらえたり、再生が息の回復にたとえられたり、強風が繰り返し重要な役割を演じたり、みぞおちを殴られて一'A punch in the wind'一息ができなく一'winded'一なったりする。

つまり、Spirit を語源の原義に戻って再考することで西洋思想の再構築を図っているかのような書かれ方をしている。小説の中の反民主主義的な政治思想も、Charles Taylor の言う「動員の時代」の終焉に繋がると考えれば、その含みの射程は E. M. Forster, George Orwell, Henry Miller とさまざまな作家の作品に広がってゆく。

【シンポジウム】

D・H・ロレンスの言語表現の独創性

司会 大山 美代 (広島修道大学講師)

ロレンスが「血の意識 (blood-consciousness)」や「星の均衡 (star-equilibrium)」といった、独自の概念を表す用語をいくつも創り出したことはよく知られているが、その一方で彼はごくありふれた言葉の使い方に対して

も、強いこだわりを見せている。ある言葉を、伝統的な用法とは異なる意味において用いる場合もあれば、同じ言葉や表現を何度も重ねることによって、その反復が突出した強度を持ったり、あるいは意味作用の「ずれ」を生み出したりすることもある。このような特殊な言語感覚、表現の独創性は、ロレンス文学が我々の読書体験にもたらすインパクトの一つであり、時にロレンスの深遠な思想に触れる入り口となる。

本シンポジウムの発案者である大山から、他の3名の講師に、ロレンスのテキストの中から自分の「気になる」語彙を抽出していただくよう依頼し、後は各自の自由な解釈・議論を展開していただいた。昨今の文学研究において、テキスト中心的な読みが主流を外れて久しい。しかし、テキストの言語こそ、読書体験における最初の「気づき」の源であり、ロレンスという作家に通じる道として意義を持ち続けることを、若手講師陣らしい視点や感性を存分に生かして提示することができた。

ロレンスの“agony”と“anguish”をめぐる思想と表現技法の展開
講師 大山 美代（広島修道大学講師）

本発表ではまず、ロレンスが前期の著作を通して“agony”と“anguish”という言葉を集散的に繰り返し用いていた事実を指摘した。例えば“Daughters of the Vicar”において、“agony”と“anguish”は、支配的だった母親の存在と決別しようとする青年の葛藤を表し、また、恋人との間で互いの存在が激しく結びつく瞬間の濃密さや強度を表す表現でもある。本発表では、度々自らをキリストに重ねるロレンスが、「受難の苦しみ」の象徴として“agony”と“anguish”を宗教的に引用し、キリストの再生を模倣したいという願望が、これらの言葉の使用の背景に存在することを明らかにした。

ところが、*The Rainbow*における恋人や夫婦関係の世代ごとの描写を通して、“agony”と“anguish”は次第に否定的な文脈において用られるようになり、“nullify”や“annihilate”などの、再生や生産性を伴わない破滅的な言葉が、テキストにおいて共起するようになる。戦争による社会の変化を経験することで、後期ロレンスは、痛みや苦しみから啓示的な要素を排除するようになり、“agony”と“anguish”の使用頻度の低下は、その思想の変化を顕著に表して

いる。しかし *Lady Chatterley's Lover* においては、“agony” と “anguish” が再生や展望への兆しという概念を再び内包していることを指摘し、二つの言葉がロレンスの作家人生の最後まで、特別な意図を持って使用され続けていたことを提言した。

D. H. ロレンスの「多彩」な “darkness”

講師 加藤 彩雪（大妻女子大学専任講師）

ロレンスはその作品の中で、“darkness” という言葉を多岐にわたって使用した。そこで本発表では、その使われ方や頻度の変化を概観した上で、初期から中期にかけて書かれた *Women in Love* と晩年に書かれた *Last Poems* に的を絞り、darkness の使われ方を比較考察した。前者のテキストでは、肯定的にも否定的にも darkness という語は使われている。具体的には、否定的に描かれるジェラルドを取り巻く暗闇には、同時代の歴史的出来事であるルシタニア号の沈没が重ねられていること、そして肯定的に描かれるパーキンとアーシュラの愛の場面では、暗闇が指し示す内容を絶えず変化させることで、人間や社会の動的な変化が示唆されていることを明らかにさせた。一方で、*Last Poems* では、oblivion という言葉とともに darkness が使用されていることを指摘しながら、安堵感という感情と結びついた言葉として darkness を解釈した。そして、暗闇に安らぎを感じるその背景には、ロレンスが幼少期に親しんだ非英国国教会の讃美歌の影響があると結論づけた。

D. H. ロレンスの初期～中期の小説作品における同性愛的表象

キーワード：“breaking” / “brokenness”

講師 田島 健太郎（九州工業大学講師）

Sons and Lovers における Paul と Baxter Dawes の格闘の場面は、その攻撃的かつホモエロティックなモーメントが与える重要な示唆にもかかわらず、これまで十分に検討されてきたとは言い難い（登壇者の一人である大山氏にも「攻撃性」をテーマとした研究があるものの、この男同士のプロットはその対象ではなかった）。そもそも *Sons and Lovers* 自体が作家ロレンスにとってある種の break-through を告げる作品であったと言えるが、テキスト内部

における“break”の用法はどうか：

- ・ [T]hen, finally, his manhood broke (54) .
- ・ Tighter and tighter grew his [Paul’ s] body, like a screw that is gradually increasing in pressure, till something breaks (410) .
- ・ "Do you want me again?" he [Baxter] murmured, broken (453) .

これらの“break”は男性性と攻撃性の間に潜在する不可避の結びつきを暗示し、それは「自我の更新」という本質的なテーマに通じる。今回の発表では、*Sons and Lovers*における男性同士のエロティックな格闘が、男性性に内在するものとされる攻撃性を、対象に投影することを通じて自らも内面化しようとする欲望の表出であることを主張した。また *The White Peacock, Women in Love* に見られる類似の場面との比較、および2000年代のゲイ・スタディーズで提起される同性愛とナルシズムの問題系への参照を通じて、問題のプロットが「他者性」に対する深い洞察をもたらす可能性を提起した。

後期ロレンスにおける「純粹」探求の展開

— 『無意識の幻想』から『翼ある蛇』、『チャタレイ夫人の恋人』にかけて—
講師 大江 公樹（早稲田大学大学院生）

本発表では『翼ある蛇』を中心に、『無意識の幻想』にも言及しつつ、ロレンスの思想における「純粹」の意味合ひを検討した。『翼ある蛇』を読んで気がつかされるのは、ロレンスが人種をはじめとするあるカテゴリーとは「何であるか」といふことについて、強い関心を抱いてゐたといふこと、さらにその「何であるか」といふ思想が三次元的構造を持つてゐたといふことである。この構造は『翼ある蛇』における異人種の独立と融合といふ、一見相反するやうに見える思想を統合するものであり、その背後には「何であるか」といふことを純粹な一要素に至るまで突き詰めるロレンスの思考を見出すことが出来る。また、『翼ある蛇』は明確な結論を持たない物語であるが、『無意識の幻想』の記述も踏まへると、ロレンスは登場人物が如何に観念に染まらず「純粹」に揺れるかといふ過程を重視して描いたと考へられる。「何であるか」と

いふことの追究，観念に染まらぬ揺れの双方に見出せるのは，夾雑物を挟まぬ「純粹」を探究するロレンスの姿勢であり，それが物事を極論において捉へやうとするロレンスの思想を形作る思考様式となつてゐることを，本発表は指摘した。

編 集 後 記

『D. H. ロレンス研究』第33号をお届けします。原稿を投稿して下さった会員の皆様、査読の審査にご協力いただいた編集委員の先生方、そして、関係者の方々に、お礼申し上げます。どうもありがとうございました。

今回は、計2本の投稿論文が寄せられました。査読審査の結果、非常に残念ながら、両方とも、不採用となりました。お二人の投稿者の方には、編集委員会から講評をお送りしております。是非に、再度、ご投稿して下さることを、編集委員一同、切に願っています。

今後も、投稿ならびに掲載の論文数が少しでも増えるように、引き続き大会での発表者を中心に、論文投稿を呼びかけて参ります。勿論、発表者以外の会員の皆様からのご応募も、お待ちしております。

*

この「編集後記」を書きながら、ふと、D. H. LawrenceがJ. M. Barrieの作品に深い感銘を受けたと日記に書き記していることを思い出した。結局のところ、「ロレンス」は何だった、否、何であるのだろうか。21世紀に生きる、わたしは、今、自問をしている。

阿武隈川の隈畔にて (H.T.)

D. H. ロレンス研究 第33号

2023年3月20日印刷 2023年3月25日発行

発行者 日本ロレンス協会 学会番号 (10988)

代表者 石原 浩澄

編集代表者 高田 英和

印刷所 株式会社 田中プリント

〒600-8047

京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町 677 - 2

Tel. 075 (343) 0006 Fax. 075 (341) 4476

発行所 日本ロレンス協会

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

成城大学文芸学部 木下誠研究室内

日本ロレンス協会事務局

e-mail : mkino@seiyo.ac.jp

ゆうちょ銀行振替口座番号 01300-5-44587

(口座名：日本ロレンス協会)

<http://dhlsj.jp>

Japan D. H. Lawrence Studies

No. 33 2023

Special Article

Tragedy of ΨYXH

..... Hiroshi MUTO

Book Reviews

Catherine Brown and Susan Reid (eds.)

The Edinburgh Companion to D. H. Lawrence and the Arts

..... Makoto KINOSHITA

Ben Stoltzfus

D. H. Lawrence's Final Fictions: A Lacanian Perspective

..... Kumiko HOSHI